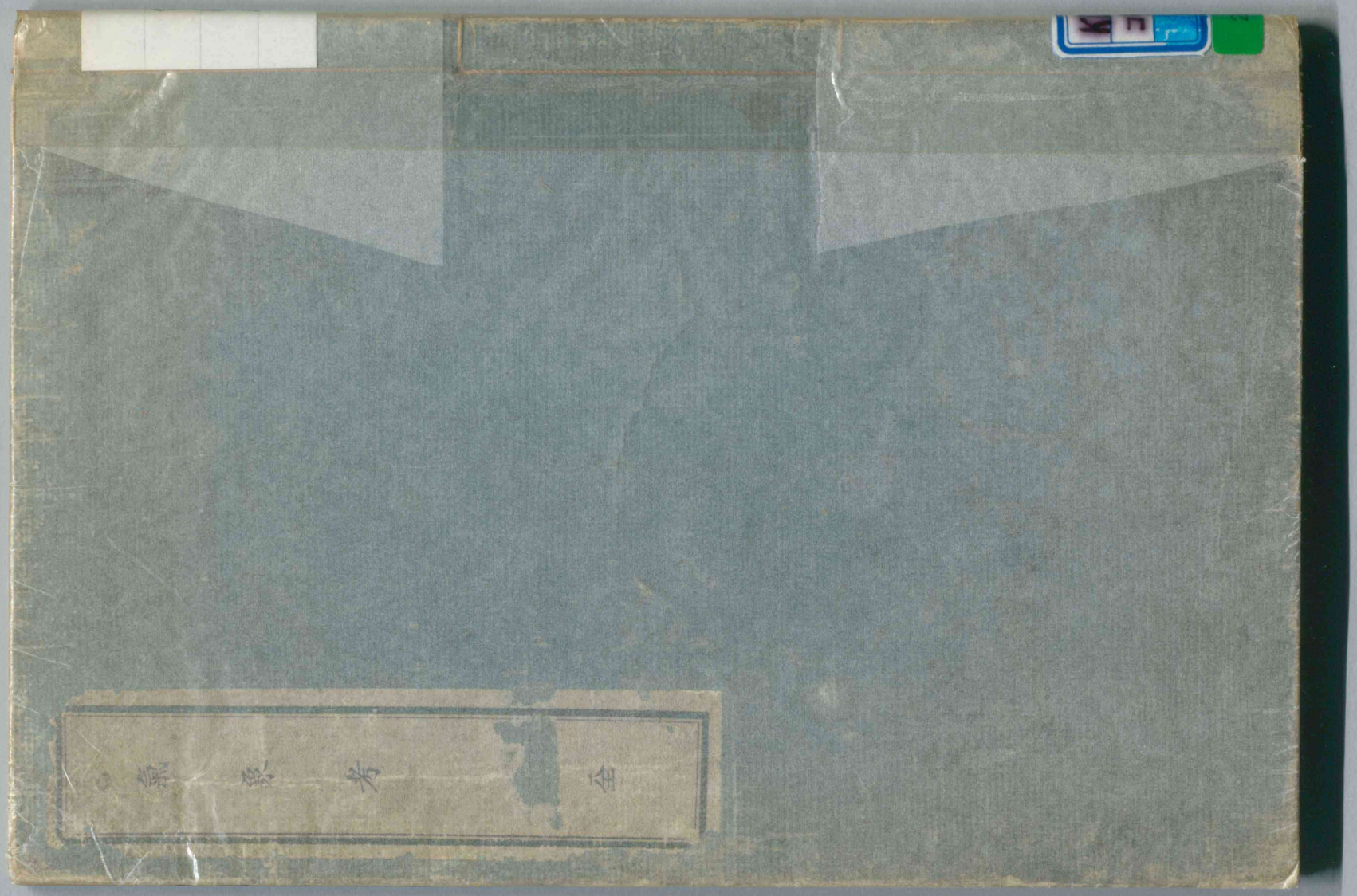

K121
259

氣象考

新居守村著

此書は、三村の皇御祖神たちの成出給へる考へかた、氣は奇靈の事ども精く解あかし、ついてに深くかくせる事をも、神の御傳への殘れるあり、秘ころさむはとしと頭にいけあらはし、人の爲人の心得にとものしたをば、とくとりてくりかへし見ば、かくもありける事かな、とうちむどろき、又うちもらひつゝ思ひさとりて、おくはかり嬉しき事もありぬべしかし

白屋藏版

東京開成館上野支店　博文社発行

百姓考補遺

山雲福神
賀福堂

此の考へは早く按じ得てありけれは明治六年三月二日講究ありし大教院にて西三條殿仙臺殿あど居ならびたる前にて天理の説教しけれは天之御中主神高皇産靈神神皇産靈神あの三柱は虚空中にて凝りてある氣の時いとりて凝り成給へるあ神るべしと心得侍りと申のべ説教をいりて小池貞景とういふ人の説の通りにては神より先に氣がありるやうにていろ〳〵と論へりおのれは凝りて氣が神となれりとの考へに侍れは神より先に氣のある事はもとよりと論ふをりしも守村と呼ぶらに秀成堀氏にそひて西三條殿の前に出たれは少講義にありつゝ後席といふ書付にたされたり

されど人の夢ゝも見ぬ説あれを證しども尋ねゝ尋ねておそと思ひつゝ年月をへゝけり此頃氣の説をいひたつる人も面をげなりいそぎていろてとをゝむるをしへ子も友もあなれは去年は六月はゝり下書せりさる我活字版ゝせむと清書をるついでゝ催馬樂の隱名の歌我橋守部大人の外は捨て人乃とらぬは僧の不淨行あどいへる空言ゝをゝられて律と呂との間ひゝ和合のをおける古人の心用ゐもおもいぬなめりあげゝしああとおもふあまりゝ頭書ゝき、ぐるしきまでゝがけふゝなう我事をもいへりその物の氣のゝしびを去りたらましかばをあいちゝが身の神とたふとむ

我ハ早く陰具をろのさまいえもいひがたきをがたゝてやをくも人をつくる神かなとよめり

人もありなましとおもひてゝぞかしゝごりがいしとおほゝな見そ

明治十八年五月十三日

權少教正 新居守村

難波帝國大學圖書之印
第七部九號
中島芳雄

活字版ナレバ誤リアリ見當リタルヲ

序文

一丁表　な神るハ神なる。　同丁裏　とちぬハとかぬ

本文

一丁表　人はけハさは　三丁表頭　棄ハうつる

三丁裏　味ハあぢはひ。　六丁裏頭　なにゝせむハなにせむに

八丁裏頭　ひとゝハぢ。　十丁裏小書　給ハたまふ。

十二丁裏　杉山に人ハ杉山々人　十四丁表頭「きけれはこゝに」ニテキルベシ

十四丁裏頭　罫ハ卦。　十七丁表　而ゝて也ハゝ又アイウ也モゝ

二十丁表頭　棄ハうつる　廿一丁表　行氣ハ行　廿一丁裏　翁わはハはわナリ

猶アルベシ其心シテ

氣象考

人をけよみちをあれどうべありと

我ひとり言神あらぎしを

古事記の序ヨ混元既凝氣象未效云々誰知其形といひ起しを次ヨ參神作造化之首云々とあり漢籍の趣おもむきどをりどおろとを

そも〳〵天地のよの中とありぬるをしめを凝り〳〵を氣象の天之御中主神次高御産巣日神次神産巣日神とぞあるをまひよ

ける本居翁のいへらくおの三柱神を如何ある理ありを何の産靈

よりを成り坐せりと云おと其傳へ無けれを知りがをし然るを

甚も〳〵奇しき靈しき妙あるる理よりてぞ成ましけむされど其を
さらに心元詞も及ぶべきあらねを固傳へのあきぞ諾ありけるを
いかれとり此翁を人の世とありて學者おゝうありける中にぬけ
て一人と見ゆれをしとがふべきあれど此神とちを天地よりも先
とちて成ましつるを奇しき靈しきて心元詞もおよばじとてさし
おきてを神の本とる本たゝぢ加美と稱へとる名義も知がとけれ
をいあで〳〵と身の在どもあへりてを心ひとつをちゞまくど
在てあむかくて天之御中主神の成ましませる理を時いとて自然
ましあるべき氣の虛空中に凝りて神とあらをれ出とるあめて

あし　かく按ひとりさるを凝りて氣象の傳へと種として種なくて時いたをを涙の上
ようき草おひ岩の上に苔むし木の根より蟬はえ苗代青めを蠡のおふるおど皆
氣の凝りてなめれむ是ぞ皇神たちの成ませる根源のあごりあちむとさとり得てぞ此
物目なれてあれゝあやしと思ふ人もなるべけれど心の目よく見れは妙しとも妙し
き事ようなむついでよいをむおゝろは群りたるキモの凝り〳〵なり此肝は氣
茂なるべしされむ心の目とつのふよは氣の出入をたづめて見るべきなり　氣字を
キと呼ぶは字音なりとたれも〳〵思ふべけきど書紀神代上古天
地未剖のくだりに牙字をキサシとよみてあり　イキの略きといふ說　神
遺方に　僞書といふ人もあれどとまれ古書なり　はよくしりてあれど　武内宿禰のいへる言に奈伽和多爾保乃岐
波古比天又保乃解爾伽母世天甫乃岐能慕世又以比布久里與保乃
支能甫之かくキと見元又阿万乃保乃解又奈連累半自米波美豆保
乃解不多通乎伽波世かくケともあり　キよりもケと　か、れは氣字キ
いへる多し

と呼ぶもケと呼ぶも字音にはあらず訓なり此は音訓あへるにてさる例は出雲風土記に畫鞆と見え又江家次第には鞆繪と見ゆ巴字とトモエとよむも此義理あるべし　この畫繪は呉音と和訓おなじたなり心得べき事よ氣字い漢呉兩音ともにこゝの訓によくあへるは大國主神少彦名神二柱はから國にまたりたまへればあの方の蠢民どもを呼びきかせたるこゝのキケやがて漢呉兩音となれるにやとさへおもいる此二柱の神たちは氣の凝りて神となりませる事をしろしめして少彦名神ハ神産日神の御子におはしませは天之御中主神此正氣の凝りくありませる事はいふもさらなり御親神のしかる事をも　この國の心あらむものどもはあとりおあせとめれい漢籍を元氣大一之神

也又元氣混而爲一あど見ゆあるべしあついあゝの古書を病を療る方技教へきせとる事の見ゆきいあしあにもつとへとまへるを醫書をい陽氣陰氣はさるものを邪風之氣霧露之氣又表氣裏氣胃氣脾氣などこゝたくあればしかいへるなりけりかくいふを心の目にてよく見さとりて氣字をキと呼ぶはこゝの言葉ありと思ひ又氣は凝りて神とあらはれたれはいと尊しと心得てこれよりいふ事を聞くべし氣にはよきありあしきあり此事をしらぬ人さかしたちて神のつくりたまはゞあしき人をつくるは何事ぞといふなり産靈の神はよきあしきにかゝはり玉はず氣とむすびて萬物をつくりたまふ事をつかさどる大神におはしますなり此は早く心得べき事ぞかの教へにしたがはぬみ子にても思ふべしされど又驚くばかり理と見せさせたるもあり山椒といふ魚の女は串にさして燒くに陰門をおさへかくして死なり心ある女にてもかくはあらじ又野飼の牛

掛巻モ畏キ天皇高祖ニマシマス天之忍穂耳命ハ物實コソアレ於吹棄氣噴之狹霧成坐トアリコレニテモ氣ノイト尊キ事ヲ思フベシ

心あちむ人は朝おきて其き氣と吐きロをすゝぎて日の出の氣と呑むべし尊き氣にていく藥ぢ日の入る氣はいむべし

履中紀に惡馬飼部等ニ黥之香とあり

遊仙窟ニ聞香氣トモ見ニエタリ

は狼の喰ひに來れむ野飼の馬と中におきて其廻りにふすときゝぬ心のうまゝ人ゐまされはむかし此穴と田人にあたへたるに神のいかり玉へる事の見えたるもうべ也とぞ思ひ出らるゝ

氣は尊ければ キキと重ねたる音が言靈のさきはひとなる國なれはカミといふ尊稱のことになれるなりけり

本居翁のいへちく美々てふ尊稱の意は美は比に通ひてかの産靈などの靈と靈々と重ねたるものなり開化天皇の大御名大毘々ノ命と申す是なりといへり

偖キがカにかよひキがミにうつろへるあり皇極紀ニ有氣味とよめる本もあり

又播磨風土記 酒山所に于今猶有酒氣と見ゆ

猶いはむ茶は近頃の物なれどいと香あれむ氣がつよいといふ俗言ながらもキがカの本なる證ならむ皇極紀のを有氣味とよめる本もありカクハシのカもキの通へるなるべし

このよへるなり高キを高ミ遠キを遠ミこはキがミにうつろへるあるキは牙音ミは唇音かよふはいかにと鼻とつまみて呼びこゝろ見るに加行と麻行との音ちかけれはうつろひやすかるべきなりさるかちに畏キのキより麻行にうつりてカシコマムカシコミカシコムカシコメと活く詞あり又加行と波行とのもあり萬葉集十四に安波奈波婆と見ゆ此は相無むなり

是にて神字をあつるカミをキキの轉音なる事しられぬべしかくさとりての上は君字をあつるキミはキキのキのミにうつれるなりとしられ御字をあつるミいキのミようつれるなりと思はれ靈字をあつるヒもミよりうつれるなりとさとられぬべしかゝて尊稱のミキの轉音と心得て見れば天之御中主神の御名は天の氣中の大人の義なるべし天の氣の時いたりて滿てる中ゝて凝りありたまへれむ實ゝ氣の大人ゝおゝにべーぬーはの大人のノウのつゞまりたるなりこはたれもしれる事なり

次になりませる高御産巣日神次ゝ神産巣日神この二柱の神も天の氣時いとりて凝りて男女なりませるになむ

天之御中主神の次ゝの間ゝいと〳〵長くもありけむの

ついでに薫の假名萬葉はじめかとるとあをど香氣の盛をいふめれむかほびこるにてそのほびこのつゞまりなるべければ我はかほるをよしとさだむ

高御産巣日神の次にさし續てなるべし守村ちか思ひとりたるは天參なる豆の葉を見るに二葉ならひて生ふるなり心をとめて木の葉草の葉を見るにかくざまに生ふるこゝたくありこはいましへ氣の凝て神のなりませるさまと今のうつゝに見もるなりけりと思ひやらる漢籍に一生二とあるもうべ

其は高御産巣日神の別名を高木神と申せるにもしるべし天の氣の凝てなりまして氣をしりとまふなればやがてありのまゝに氣の神と申せるなりけり　高ハ美稱にて木は假字木ハ具比の切と本居翁いへれたり平田翁もこれにもたゞいて見ゆれど守村はちからぎクヒのクハ氣音のうつりて夫よりハヒフヘと活く語となれりとおもへは其本は氣なりかれ豐齧野神の別名を豐組野神と申せるもクよりマミムメと活く語となれるなり又豐買神と申せるカも氣音のうつれるなりされは語は別々になりつゝも同意なるにて氣音のうつれるクカとまぶいふ正しき事とよく思へ猶あやぶまむ人は角凝神のコリとも考へ合せ見はい本居翁のいへらく豐雲野神の雲野は字を借字にて明なるべし

久毛を久牟久美久比許理など、通ひて物の集り凝意と初芽す意

好忠集ニ雪間にきざすわか草のトアリ又夫木集ニ雪まよりきざしやすちむ同たまさかにきざすと見えしトモ見エタリ

とを兼ねる言にて此二の意又おのづから相通へり物集り凝て物の形を成ものなれはとまでにさとり深く考へられとりされど天の氣の凝て天の氣中主神又高氣神とあれ出ませりと說ぎりけるはをしき事かぎいかなればか漢籍に造化之母元氣大一之神又氣者生之元又元氣肇啓有神靈人などあれいそれにならじとせる故にや平田翁い漢籍をもとり用ゐつゝもキサシのキいイキのイの略とのみ思ひ入て氣字をキと呼ぶをこゝの訓としらざりけむかしさるにならに書紀神代巻のをしめる溟涬而含牙とよみ來れる牙字を牙とよみ改めてカビのカを被の意にて物を其と指て云とゼ

こゝに引出たる古傳は世のいとめなりよく思ふべしいとも かたじけあし國をかたむくるも家をおこすもこゝの氣のあしとよしとなり

は靈妙なる物を云語ありかくて加備い加微と同ゑ加夫とも加牟とも通へりといれとり守村按ふにカミいカゞミの中略などいへるよりはよろしき說なれどカゼい氣の凝りてなる事とをとらざりけれい心ゑだき見ゐれどかひあかりけり古史傳一八丁ひちきヨリ見ておもふべしカビい氣が種ゑて凝あるものありともし火ゑ出つるカビ見て志るべしあすは雨ありあすを風ありとゑれもよゑ見しりていふあり天地の氣の凝りてあらいるれをぞあしキキが氣氣本ゑてカゼいキキの音のうつりとるなゑて氣字キと呼ぶをこゝの詞なれいゑたくしけれど猶いはむ古書ゑなりくてありあまれる所をなりくて

皇國の書籍にキヲヤルキガイクといふ事見えずといふ人もあらむ守村い書物に見えずいひつぎ来てあるがくずしとぞ思ふ

倭姫命のゝたまへるかの神魂の精靈父母の氣に入て云ゝと考へ合すべし

なりあはざる所にさしふたきてとある其物をしゑひあはせて天地の氣を鼻口より入てかの鶉鴿の尾と頭とうおかをさまゑて汗もしとゞゑえもいいれぬ時ゑいとりてもらすをキヲヤルキガイクといふ皇國人い大かたかくいふべけれど國々の中にハキガクルキガウツルとやうゑかいれるもあらむかしき詞ときこゆれども心の目もて見れば神あゑぞしてとが口より云出てあるべきこのキの本は鼻口より入る天地の氣と火氣とふくみて食物をこなし一體ゑ循環の汁となりさるを和名抄ゑ精液の二字は見ゆれど訓のしるしてあきは順朝臣もキヲヤルキガイクのあやゑゑをしき詞をとるゑもたらぬとふりや捨けむ我はゑをしき詞ゑよりて精液の二字ヨキヽとよむべゑぞおも

萬葉集にしろがねもこがねも玉もなにせむまされるたから子にしかめやも

同集によの人の貴みねがふ七種の寶も我は何せむにわがなかのうまれ出たる白玉の吾子古日は云くとも見ゆおもふべしついで御紙面拝見致候然者今般男子出生にて多年之心願相叶先祖迄子之筋相立大慶に存候御看一籠御祝被下辱落手致候近日御出之節出生御目に掛ケ度右貴報迄早々頓首

大岡越前守

五月二日

酒井岩五郎様

この手紙は明奉行といはれたる方の也心なき人もよくよみて見よ

ヨキシルとよむ　はもとより也

ふかいふを學者うをとるまもとうぬとわうふべけれど此人とちもふえるゝものとゑむものとゑひあいせをいみじきをり〳〵はヨキキガイクといはで何とかいふべきこい子を作る本なればわれをわれてヨキキガイクといふぞ真心なりける又精液い子を作る本あればこの文字まその訓あくてよからむや心あうむ人いよくさとれ偖精液いましらげ血あればふといぶかしむ人もあうむかつう〳〵思ふまは身のうちの火あり水ありされば氣が本まてチともいふまことそキとチとは音近ければあり萬葉集またまちはふ神又女の神もちはひたまひまとあるはさゝきはひのさの略きキをチまうつろはしまいへるあめり思ふに蒐風のシ疾風のチ同言にて轉れるなるべしチをシといへる明證は萬葉に阿米都之乃以都例乃可美乎又阿米都之乃可美爾奴佐於岐こはチとシと音近き故也

かゑ血の本い氣あればキヲヤルキガイクといひつきかたりつき来ぬる詞ゑぞしともくぞしされば神ならすしまたが口よりあとはいへるありけり此血を循し〳〵まの果漉分まましらずまあす畢丸の文字は和名抄まに見えねど陰核字を篇乃古とよみまありおれキンタマにて此物は血をましらずに漉あしまかの嚢にをさめおきまを精液をやる人の身の玉もの古ゑ篇乃古といへりともキンタマとパンいふぞめでゝき其は氣玉のノをンに轉して強ゑ呼べるなりの音

陰具のあやしさ猶しちせまほしくて人わちへもふりすてゝある人いへちく瘠持の妻もちていさくさし込みたらむ藥よ醫師よのさわきせず角のふくれをゑめるにあはせ抱き起しいさき居て脊骨の左右を一二三四五六七八九十と撫おろし見よ下る事妙也とゞ

又息切ゼなる男は妻のをふくきふめさせて折々氣を吸ふべ｜妙藥とゞ西洋人ほ宵ときけりかの燒輝散もふ｜

かゞかりあやし｜き物なれば心｜て陰具はみだりになせそ

ついでに出産の時は夫の下帶のは｜を少｜切て小ゝ丸めて三粒つゝをり〳〵呑すべ｜清き水にて安産うたがひなし｜微の物おりぞは又のまずべ｜下る事妙也又松茸の笠小ゝかきて右にふゝ如ん用ゐるもふ｜ふんあらへは潰たるにてもふろ｜

猶ゝはむ惡氣の人の子と生れては死また生れつゝ死て親をなかするを樂｜むさまなり其氣をはらふるにはその墓所にふ

の近くて轉する事は信のンをあだちめてシノブにやとへるにてもしるべ｜

氣玉は人の身の大事の物にて寶とも寶なれば陰囊の中にをさめてあるなり

ついでにいはむ湯澤義路いへちくある人かたそむなる藪にて竹を切て其切頭にて陰囊を破りて氣をうしなひ醫師と呼びて見せけるに睪丸なしこれなくてはとて尋ね得て桐の箱ゟ入て大事にしおけと教へつゝ手あてしければ疵もいえて十五年ばかりいき居たりといへり是にても思ふべしつふして其氣ともちしてあらぬ玉ものあれど箱に入て大事にせよとさとせるなり又一宮榮樹のいへちくある醫師のやどりに睪丸三つある男の來て一つとりてたべとこふ醫師しばらく考へて弟子に其男を與へ連れさせて柱に縛り付させて睪丸を出させて醫師つく〳〵見る所を弟子太刀をぬきて首をねむとも男おどろくやがて睪丸一つ切落したりとそれ病のなりけり大事の所なれは神經の筋彌綸しかつは延縮する細き管もあれば實のは縮ミ上ると思ひはかりたるあり又按ふに德川内府軍に打負腹めされむとせる時大久保彦左衛門まちたまへとて睪丸と握り見てとく〳〵落たまへとすゝめたりといひ傳へてあり睪丸なれはいかゞあらむと試みたるなり人はかくあらまほしきものゞ書籍の中見つゝ睪丸は氣玉にて大事ある事もしらてあちむむづべきなりかく精液や睪丸やをとり出てゐとく〳〵しくいふは何事ゞとるにもたらぬと一口にいひおとす人もあるべしさるえせものはよくきけ古書どもに天津麻羅命大麻羅命天津赤麻羅命など神名に負せたるは男女の陰具はくしともくしき寶なれはなりさるからに平田翁のいへちく此頃大自在天の神寶の天根あど彼御戈の古傳を思ひ合せて神名の麻良また陰具と麻羅と云も元より古言にて梵語に自在天を磨羅と云も我古言の彼國に傳はれるにて同語ある事を解り得たりといへり此翁は學者の中にぬけ出て見ゆれはころ偖守村按ふに火水の氣はあるが中に清く勢ひすくれてあるは此氣の凝りて石をはつくるなるべ｜たれもいまだ石の考へせされはいなと頭ふるもあるべ｜さる人は握て見よ冷｜しか冷き中よりうては火いつるあり此くしびもて考へ見よかし｜つち〳〵按ふにかしこけれど天之御中主神のありそめたまへる御形は陰陽を無さる一石の如くなりけむさる形の石と見たれはいふなりかくいふとあちじと思はむ人は我國の群馬郡なる榛名神社の御形岩を見てよ見あぐる所は男莖なり宮造りかけたる所は久保ありくもし｜ともくもしき岩ゞ此一氣二つにわかれて高御産巣日神のなりそめませる御形は陽石神産巣日神のなりそめませる御形は陰石のさまありけむ此三柱は御祖神ましませむ其本と氣の凝て末の世迄幽に見もるなるべ｜とおもひ得て陰陽石はやがて神漏岐神漏美の神たちの神實形れば尊み祭りなば子孫き人も子孫まうくへ｜とと｜へて祭らせ見｜ま子孫得たり又得ぬもありそれい故さて高御産巣日の高も神産巣よ｜ありてなりもゑまいふとまちて見るべ｜

日の神も美稱巣日の字は偖字ムスは生ありゞは凡て物の靈異な

るをゞといふ　書紀ニ産靈とかきたる靈の字よくあたれり天ツ日のヒも同言ニて其本は氣なり　古事記傳にムスビの事は委しつきて見るべきなり　書紀に神皇産靈尊とあるぞ正しかるべきその例あれのれと見もれば　ニ美稱のさま形れは高御神皇と御の字皇の字と用ゐる事ニ形りつちむかつはいとも尊き皇神ニおハしませはキの音おのつゝちミニようつりて美稱重祢申も事ニなれるの　上にいへる如ニ時いとりて氣の凝りて生ませる此男女の皇神におはしませい御體をあはせ氣ニて其氣やがて氣産靈神にて互ニ氣指あふ處より天地をいとめて神をも人をもつくり又世間ニありとあるもの何も〳〵悉に此二神の氣産靈に資て成出る事ニなむありける　夫婦の氣指あひてキヲヤル處よりなれる體をゝといふもキの音のうつろひて形るべし心の目ニて考へ見合すべし　か

かく御の字形きはかゝと同音重形ると約めてニや古言ニキをゝニ轉ハして呼ぶゝち

ムスビ

ほいわし
鯛ニつ理ウツむべしりぞんる事妙也是ニより考へて魚類を忌む祈禱者には心すべき事ぞ

古傳ニおしくひのごとくもはあ如葦牙因萌ニものにてなりませる騰之物而成あしかびひこじの阿斯訶備比古遲神天之常立神とたちのある二神も氣に成玉ひけむとぞおもふ考へ合すべし

ニいふを猶いかにとおもはむ人は火産靈神をあはせ見てさとりてニ此神の御體をなはち火ニて萬物を産成たまふからニ火産靈神と申し奉るなりかゝて氣産靈の神の男女の氣指あふ處御子神をもなしたまへるを交接とゝ思ひ誤りて猶あやふまむ人は暑氣糞氣の氣指あふ處より蠅あどの生出るを見て氣産靈の奇しき事をしるべきなり　二柱産靈神たちは御功德猶いとむ伊邪那岐伊邪那美の命とさる處ニさしふたぎ精液をやるべき夫婦の道と尾頭うごゝも鳥もてをしへ生死の氣作り玉ひなり〳〵てなりあまれる處を形り〳〵てなりあまとあらハして一日ニ千人くびりてころさ形一日ニ千五百うふやたてゝなと世中のありさまとをしめさせたり産靈皇神たちの御功德これ形て先さとるへきなりついでニいむむ事戸とゝたし玉ひてたがひふ大神となりたまへる傳へ深く考ふべきなり生氣と死氣とつゝさとる神とならせたる故なるべし　守村い字音ニあへるニて氣のキいかへす〳〵

訓とぞ思ふ其いキホフキソフい氣ヨホフソフをそへとるなるべし又効よわきをキビワと呼ぶい氣にヒワ〳〵のヒワをそへとる詞なるべし又俗言ヨい氣ヨ弱をそへてキヨワといひ氣ヨ強をそへてキツヨといへりこのキをイキのイの略とたれもおもふべし神代紀ヨ吹撥之氣化爲神とあれはなり守村醫書はしらねと心の目ヨて見て之の考へヨはイキの本義を天地のを鼻口より入るゝ肺のキヨ飲食をその袋のかとはらヨある肝とともヨこあをあるイを加へたる詞ヨて膽氣ヨぞあるべき

此氣化爲神ヨても氣凝りて神となれりといふ我考へを思ふべし

二言合せて一言となれる多し一つは稲光イノチは息中イビキは息引いきとしいけるもの此膽氣ヨりていきてあれ

泉いむイツミは出水イナビカリ電

又イケムイクとも活く

はやがてイカムイキイクイケともイキムイクとも活くありさて二言の一言ヨあれるなれはその加へたるイを略きて云はさる事なれどイキを一言と見て之イを略けりとな思ひあやまりそ大祓詞ヨ氣吹の二字をイブキとよみてありイキフキのキを略けるヨはあらばイとのみいふも則イキなり其は加へたる膽い身のうちの氣の本ヨてその轉れるイなれいなりかのキをヤルキのイクのキの本い火氣をふくみて食物をこなす膽の汁なるべし

かくいふい和名抄ふ膽ハ爲中精之府又白虎通に膽肝之腑也とあり又天照大御神の青人草の食て活くべき物ゾとの玉へるその食物をこなすい膽なりされは心の目にて體を見るに鼻口より入る天地の氣と食物をこなし血として循す膽とにて神經をはじめ何も何もいけはたちかすとおほゆればあり

倭訓栞ヨ膽をいとよむは氣の義なるべしと見ゆ

鳥い水底ヨ入て浮出て長く

息はぐ故ゝ志長鳥と萬葉集ゝ見えたるあい長居する人を氣長と云ゝおなじ風い氣あればシといへるゝともおもふる其い嵐ゑ荒風。このシハアラサムアラシのシゝはあらじかし颯も廻風の意あるべし　ついでゝ氣は常にみちてあれどしづかにておこる時氣瀬となれば風字あまゝ氣いミゝも轉りやをし水字をあつるゝばを大てゝしかよむあり

地の津液にて氣ありされば氣出のキをミゝ轉しイを略きてゝばとよぶあるべし又おもふに父母のヨキ、のいきしよりあれる體あればそのキの轉れるミにて身字をあてたるあめり又實字をあつるミも氣ゝよりてゝおりとゝのふあればキのミゝうはれるあるべし　ついでに續紀高野天皇大命に天下方朕子伊末之仁授給同書宣命に美麻斯乃父止坐天皇の美麻斯爾賜志天下業止云々イとミとうつりやすきもおもふ　猶おもふゝ火字をあはるヒも氣あればキよりヒにうはれべし

り又見るもの聞ものゝあきたるをりゝ口よりいばるアクビ。飲もの食ものゝあきたるをりゝ口より出るオクビ。いばれも飽氣あり

けり　口よりしたゞちにいづると開氣膳にいたりて出るを興氣と一音五音にて呼びわけたる皇國の言靈のさきはひたすくる尊さ是一ツにてもよくおもへかゝるにつけても五十連音は國寶あり其身の寶なり心あらむ人はよくおほえよ　さてキよりうつれるヒをくをしき氣の中にてゝおとゝくをしき事に呼ふめりムスビのヒクシビのヒ天ツヒのヒをいふもさゝあり石におもり居る氣ものにふれてゝ火とあゝいれいばるいとくをし冬の氣の凝たる氷いとくをしまして夏の日ゝ氣凝りてゝ氷の降るあやし　此氷の降るを世人興山なる沼の底ゝ沈てあると龍といふものゝまきあげてと

いふ守村按ふゐ暑き氣地の上ゐみちて寒き氣地の下ゐせまるを山の神のあらびて天雲おこし沼水と大空へさそひのぼる其いきほひゐそひて寒氣あらハれ出てヤがて水の凝るなめりとぞおもハるゝ其は冰のふりたる跡のいと寒きゐて志らおもふといへは篆笠原直彦のいへちく春名山ゐ大冰雨のふれりしをりしも沼邊なる木々ゑ枝ゑつちゝさがりけれはげゑ〳〵といへりけりついでゐいたむ天武紀ゐ氷零大如桃子本居翁の今世ゑ閑字と云物ゑて雹字これなり閑字と此字音とハウと呼しが訛れるゐやとさとされたり此翁は王勝間ゑ皇國の言と古書どもゑ漢文さまゑかけるは假字といふものゝなくしてせんかたなく止事と得さる故なり今はかなといふ物ありて自由ゐかゝるゝゐそれをもてゝ不自由なる漢文もてかゝむとをもるはいらなるひがこゝろ得ぞやとをしへおられたるよき翁ゑなむありけるかばらり此翁ゑありつゝも字書ゐ雹ハ雨冰也とあるゐをもがられて今世ゐ閑字と云物ゐて雹字あれなり云々此字音とハウと呼しが訛れるゐやと云るはなま〳〵の學者ふりゑてをらし其は雹字和音ゑハウと呼る事もあるらしちず此字篇韻の書はさちなり和名抄ゐも補角反と見ゆあり守村つち〳〵おもふゐハウと訛りてヘウと呼るゐハあらじ我あたりゐてはアラレガフル又コホリガフルともいひ天武紀ゐ氷零とあれば冰字音とやがて呼べるなめれば今世ゐヒヨウと云物ゑてとさとしてよらるべきとや尊き翁ゑもちかゝる事も見ゆれは心あちむ人ハ學者めらさずありのまゝゑものすべきなり和名抄ゑ菌字ゐは和名しるしてなけれど菌背二字ゐ多介と見ゆ此物は草木の氣と地の氣合てなれゝば氣之子と呼ぶぞ

正しき和名なるべきをタケとせりかくいふは發氣ゐてチを略きキをケゑ轉して呼べるなるべし萸字を和名抄ゑ木の美々と訓てあり人の耳ゐ似たれはうべなり新撰字鏡に彌々太介とあるも人の耳に似れハあるべしふと思ふゐ人の耳の名義はむらひ居る人の音の氣を天地の氣もて来て入る所なれは氣氣なるべきと轉ハしてミヽと呼ぶゐおそ聞字あつるキヽハ則人の音の氣と天地の氣のもてくるなれは氣々ゐくそれキカムキヽキクキケと活くなるべし此木常蘂のいへらく氣之子とコケといふ國もありと是も草木の氣と天地の氣とゐてなれば氣氣なるべきを轉してコケといふあるべし苔字をあつるも天地の氣と其物の氣とゐて生なれは氣々の轉れるゑて同意なるべし偖又菌字竹字とあつるタケといふはその本發氣あめれハ物ゐよりて長字丈字高字をハて又うつりては年のたけたるあど皆同意ならむと思やらるかく云をあやぶミおもはむ人ハ五十連音もてしるぞよき其はアもイもウも鼻口より出入もる氣の喉本ゐふれてアの音となり舌にふれてイの音となり唇ゐふれてウの音となるゑの喉舌唇の三つが音のはじめゐて牙齒ゑふれて萬聲となるゐり其本の本はアの一音なり萬聲の其本は氣なりかくさともをよくさとりて見よ世中にありとあるものなりとなるもの何一つ氣のなさゞるはなしされはキの音のカクケコと轉るはさる事にてミともシともイとも轉りつゝあまたの詞をもなもならむ其は氣産靈の神たちのさきはへにて言靈のたもくる國なればなり此本の本は時来りて氣の凝りてなりませる天之御中主神一柱なりくもしともくもし五十連音のアゑ合せて考へたらむには明らゐなるべしついで

ふ天守とアメと呼ぶ義をいはむ虛空には氣のみちて靑く見ゆれは早き說の如く靑見延の約あるべし虛空とアメと呼ぶめりつゝでに天之御中主神日のミ國にうつりましたる跡に御氣稍のおりて北辰星とゞ見ゆなるべきゝくおもひとりて見れは氣のなり凝りませる處はおゝあるべしとおしゝゝらる此御神氣の凝りてなりはじめなれはゝの先ふいゝてか北辰のあるべき平田翁深く考へられたれどしたがゝれず又星を國といふ說あれど守村はとらぬあり嘉津間答問に寅吉いへらく師彥山に人に連られて此國土より見てことに大きく見ゆる星と目ざして上りしゝ近くよるゆゑ大きくほうとしたる其中を通りぬけて遠く先へ行て顧れゝ本の如く星ふて有しあり然れは星ハ氣の凝りたるものゝといへり此は机のうへの考へからねばげに〳〵とゞおゆゆる漢籍に萬物之精上爲列星又山川精上爲列星又星者水之精也おど見ゆれゝ氣とおもはる偖又漢籍に陽精爲日日分爲星其守日生爲星ともあり此によりて見れはいよ〳〵天之御中主神より星は後なることあきらかり高皇產靈神神皇產靈神の天ツ國にうつりましたる跡にも此神たちの氣のあらはれて見ゆべきなれどいまだ思ひ得ずもしは淮南子に北斗之神有雌雄と見えて雄左行雌右行とあればこの星にやゝれは星をしらずしれちむ人よく考へてよ次々になりませる神さちの氣も大空にあらはれてゝのミいきゆひによりて大きくも小さくも又位をも定て見ゆめりといへは弟新井爲業がいへらく平田翁は天之御中主神のおはしませる高天原は北辰の中のやうに申されたりさらは星はこの國土

とおかしものかとおもひやられ侍をと通俗列國志ふ雲中子が將星落て燕山の西にあるを見て其所在を尋ね來けるに西伯のゝの尋ぬる將星は此子にあらずや又大風の木と吹折て是ゝふれて武王の死たるゝ隋侯の臣季梁が翼彰の間ゝ一ツの大星と殞をと見てしまる又虛危の間と見るに文星暗沒しておつる象ゝ似たり吾が命盡ぬべしと管仲が首とたれて嘆じたる此外通俗三國志にも星を見て人の命の盡たる又盡ざるをしまる事も侍り星を國と見てはいぶゝしまれ侍り此度凝りたる氣のあらはをて星に見ゆゝとの論げに〳〵といへり守村星と氣の凝りたるあめりと思ひろめたるは暑氣の俄に冷氣にありさる夜星のミだれ飛ぶとおがめて此ハ數あらぬゐがどちの氣の凝りたるがあらはをたるのなるべしさるはあおもゞしと心のおどろきうごくよりミだをちるめりと思へるありけり其後寅吉童子が氣の凝りたる物ゐといへると見ていよ〳〵星は氣の凝りと思ひ定めて西洋人の星は地球と同類ありと云說ハとらぬなり平田翁はおもてにころあらはさね心の種にせむと心の底は西洋學にもよりてあをは說文に♀は萬物之精上爲列星从晶生聲とあると人の臆說なれば信ずといはをたり猶いはむ平田翁のいへらく月の光る處は國土の海の如しといふ事西洋人の考へたる說にありて然る事と覺ゆをども鬼の餓つきてゐる如く見ゆる所に穴あきて有りといふ事心得がたしといひけをは寅吉童子こたへけらくあたの說は書物ふ見えたる事ともてのたまふ故ゝ違ふたり我は書物は知らず近く見て其穴より月のゆしろある星の見えけをは穴ありと申もありとこたへてゐらひたるにも西洋書籍のねぶりさめずて星の說

ある人いへちく西洋人には癩病おほし國よりておしあべてなりとさもあるべし

勢多郡赤城山の麓に白川といふ川あり是も十五日をさゝひにて上下と流れるといへり信濃國あと淺間山の麓に血の池といふあり此池より流れいつる川水十五日前はもみ十五日後はにごると其國人にきけばこゝに心あらむ人ハうませたる子よりうぶ湯あむす時よ坐婆よ足裏よく見させて黒き所あらバ醫師を呼びてゐりとらせ跡よ藥をつけさすべしおれ癩病よ別るべきあしき氣のあるし別りときけり

後古八卦方位辨下の頭書よ孕ミ月

ともうたがひて佐藤信淵に論はせさり平田翁もち此頃はやる西洋學に心はやらをたれは深くおゝろ用ゐせずはやりにはやりてとるべきとちずあちぬ道にゐけ入りぬべしついでにいはむ西洋人は死躰とひらき見て譯とこざゝしくいへるよしあをど夫とかへて子あり妻をゝへて子ともつありそはいのなる故ともいへる事をいまだきの子ずあき人の子とゞませむと思はゞ其妻の月經止や否や速に閨房ふ入べしとこゝの傳へにも月經と花ささきさりといへはその花をさまるやがてあひたちましかバミごもりぬべけをど子をもちて子あきよりもなげきあり其はけがをの氣のきよまりとへねば大ゝたは癩病のとまうくべしおそるべしつゝしむべし皇國は猿もち月經よあをば男猿と谷をゝへて住きよまりて男女ともにもむありふかく思ふべき事ゞ備こゝた神の作りたまへる國神のうしはきたまふ國なをは心あちむ人はよくきけ男に陰丸二つあり女に卵巣二つあり子宮の左右其故よし考へ見よとの惠ふゞあるべき大和國の吉野ある音無川の流は月毎に十五日とさゝひにて上り瀬と下り瀬と水あり水あしとゐはるありといひ傳へたり我は正しく十五日才きたりけれゞ上ツ瀬は水なんて下ツ瀬の流を見たり又わが國の多胡郡ある大澤村の不動尊の下の川にすむ魚ハ月毎に白月にハ腹白く黒月にハ腹赤しと上野國志に見えたりいとあやしいとくすしふく尋ねたは猶ありぬべし此によりて按ふに十五日前ハ左の睾丸のと左の卵巣のと出あひて男子にあり十五日後ハ右のと右のと出合ひて女子にあるべき理りなめれど右の手に筆も針ももつべきことわりなるを左の手にてものするがある如くにて男ハ左ののみ女ハ右ののみ又男ハ右ののみ女ハ左ののみ出あへハ子宮にいたみあくと

いつる川水十五日前はもみ十五日後はにごると其國人にきけばこゝに心あらむ人ハうませたる子よりうぶ湯あむす時よ坐婆よ足裏よく見させて黒き所あらバ醫師を呼びてゐりとらせ跡よ藥をつけさすべしおれ癩病よ別るべきあしき氣のあるし別りときけり

後古八卦方位辨下の頭書よ孕ミ月

も子ハあらじかし其ハ左の精液は男と作るのなれハ氣強く右の卵ハ女にあるのなれハ氣弱き故とゞおほゆるかく思ひ得て胡蘿蔔と牛蒡とにてためし見しに胡蘿蔔の種ハ糞水の強きをひきて蒔き深く土をかけてハ生る事あし牛蒡種ハ糞水の弱きをひきて蒔き薄く土をかけてハあしこれ弱き物に強き糞強き物に弱き糞のあはざるありされは左の精液には左の卵出てあひ右の卵には右の精液入りてかゝらねは子は作られぬなりけりさると左のと右のとあひ右のと左のとあふ夫婦はせむすべあけれは妻とかへて左のと左のと夫をかへて右のと右のとあひあふ中にしたちむよはかるらず子何るべしとゞおもハるゝおはいまだ誰もしらぬ事別れハあやぶむもあはむさる人ハよの中よ男子のミもつあり女子のミもつあり又妻孩かへく子があり夫とかへて孕むありおれよりおし見て考へ得たるゐ別とおもひしれゝし又十五日前ハ男子十五日後ハ女子別らむ事は雞の十五日前の卵十五日後の卵をむやして見よ十五日前のは雄鳥おほくて雌鳥もく別く十五日後のは雌鳥おほくて雄鳥もく別し我かく考へろめしはよし野別る音無川の上つ瀬と下つ瀬と十五日とさゝひにてながれゝハると不動尊の下別る川の魚の腹の十五日とさゝひよてかハる白き赤きとによりて別りけり皇國は神國よてかばゝりもかしおき事のあ別れば心と用ゐて考へ見むふ何一つたらハぬ事ハあらじゝし西洋人の月經止むや否や閨房に入るべしのとしへにむゝられて子別き人血筋けがもあと別ゝれ猶いはむ月月々經あり十五日前後うべなハれずといふ人もあらむゝ其ハ孕ミ月もしらぎ思ひねゝりもなきなり守村子がほしくは妻をもてとをしへてうま

の事ハいへ
りある人云
西洋人ハ精
虫卵ヨ入り
て子と成る
といへりと
いとをかし
虫が子種と
なりたちま
しゝハ虫持
の成るべし

後古ハ野方位辨の頭書ヨ孕月の事はいへれどこゝにも孕月しらむとおもはゞ。この三を心にとめおきて上なるを十歳とし左なるを十二とし一十二とし一十五の女なれば三六九十二の月也その月也十六なれば上の二五八十一の月也何歳にてもしあるべし舊暦にてすべしこれ女のさかる月なれ

せたるあり天地の氣にて作りさる川に十五日前後あり又魚にもさるあり深く思ふべき事ゴいたつちに精液ともらすのみにて子なれは泪の種あるべけをば妾ともちて子とつくるおもひはゝり深き人もあらむかとおもふあまりに　又おもふヨ和名抄ヨ豊ハ久々太知とあり此ハ春の氣を得ヨ其物の氣まさるヨりヨ氣々登あらむをキをクヨ轉シヨ呼ぶヨハあらじか雲字をあつるクモも氣茂のキのクに轉れるなるべし　又はキのクに轉りてクマムクミクムクメと活くにや草字あつるクサハ氣多のキとクヨ轉シフを略けるよや又ハキフの約めのクといふ　又おもふヨ氣をケヨ轉ハシヨ呼べるおほし古事記ヨ易子之一木乎と見えたる則一氣ありさるを木字にをかりヨ私記ヨ古者謂木爲久といひ本居翁も萬葉集ヨ真木柱を麻氣波之良又松木を麻都能氣とよめりあど證されたり　ついでに氣の音のケを古書に多く用ゐてあをば心せずハ訓なるをも音と見つべしよくおもへ　こを氣字ヨキの訓ある事を心得されハあり其を神氣をカミノケ鹽氣をシホケ火氣をホケといへるおかし例とぞおほゆる　ろく氣字にケの訓ある物をキ。ハ訓なしといゝでゝハはむ　又木も氣ゝり生ひ毛も氣よりあるされハ其本は皆氣ヨあむありける　倭訓栞に天毛をふらし地毛を生る事まゝあり皆欝蒸の氣凝て成れる也と見えさる浮さる事にあらも我も正しくふりたる毛と見たりゝの須佐之男命の抜ちらしさまへる御毛の木とあれる古事をもおもふべしその本皆氣なる事にあらを　守村おもひ見るに子字をあつるコもその本をキあるをうつろをしヨ呼べるにこそかの精液ヨヨあるあれをありキをコヨ轉シヨ木蔭をコカゲと呼ぶヨヨも思ふべし又字書ヨ氣ハ息也とある息字を神代紀ヨ高皇産靈之息云々と見ゆかゝれハキのうつれ

はその月にはらめる子は大みたは長命變にて孕月ならぬのは先短命とし。るべしされど月經にてたがひのある事は思ひはゝらるべしあゝ女のさかる月あるをしらぬは犬猫にもわらはるとこゝろすべきなり

雪のふりぬべき氣をユキゲといへるもたれもよくしきり

るコといふあり又おもふまゝ我あゝとりまゝは子を夜食ノカタマリ
といふおれより思へい凝のリを略きコヾの約りといふ人もある
べし此コヾリもその本いキまゝラリルレと活けるなるべけれも
霧字をあつるのと同語あめりとおはゆさて又物語まけしういあ
らゝを俗ニカクベツノヤウスニモアラヌ けしからぬ ヨノツネノケブライデナイ と見えたるい氣まき
をそへゝそのさまをいへりときあゆ是よりおしゝ見れい春のけ
しき 春ノケブライ 秋のけしき 秋ノヤウス あどいふも氣まきをそへたるな
るべし 景色の字音といへるは深くおもはさるなり 又古き詞まに異心二字をけしきおゝろと
よゝてあり ベツノケブライゴヽロ あれも氣まきをそへたるなめり又けし

きばむ キモチヲ見セル けしきとる キゲントル けだかし 氣高 けとほし 氣遠 けち
かし 氣近 けざやか 氣亮 けうとし 氣疎 ものけなし 物氣無 ひとけなし 人氣無 け
どる 氣取 けおそろし 氣恐 又 夫木ニ ひむろのあたりけを寒ゝ 後拾冬 まきの炭や
くけをぬるゝなどキをケといへるあゆてかぞへがとし猶おもふ
にキをコにうつろをしたるをうへにいへる外に東風二字をコチ
とよめるを氣發あるべし其をキをコにうつしタチを約め春風あ
れは志か呼べりとぞおもふる 疾風をハヤチと呼ぶそのチハ風をシと呼ぶ
そのシのうつまるあるべしとおもひつれど
ろのチもハヤタチにてコチはチと同語にやとも思ひやらるゝいでにいはむ織字とき
タナシとよめり此詞は氣發無のチと略けるにはあらじの古き傳へに家をたち出てか
へゝ来ぬがいきて居るゝいのまのろれしちむにそろの人の筍まゝ飯もりすゝていぎた
べと蓋とりあげてろのうちと見るまゝ湯氣の露玉なしさちばいきてありとしりさかく

ば死たりとしるべしといひつきてあり是も氣發を生とし氣發無きを死とせるなをハ
やがてキタナシあるべしとぞおぼゆる萬葉ふ荒雄らと来むか来じかと飯盛て門に出
たち待どきまさずと見ゆをハ右にいへるいひ傳へハうきたる事にハあらじ又織字を
ケガレともよめり和訓栞に氣枯の義あるべしといへるよろしかるべしこのケガレよ
りおもへはいよ〳〵キタナシハ氣發無とぞ思ひ定めらるゝかのキヨシハ氣佳ハ義あ
るべしといへるもさる事とぞおもひやらるゝ猶いハむいにしへハ天皇ハ國見したま
ひけれハかしこけれどををも神あらはむと山又岡にのぼるをり〳〵里々をながめや
りたるよ杉むら竹むらなど黑みあるほどよみどり深き所をおりて見れば富める家あ
り灰色めきてみとりうすき所をくだり来て見ればおとろへたる家ありかゝれはこそ
國見せさせたまへるなちめとむかしの天皇ぞあふき奉らるゝかの軍にかしこかりけ
るかからの呂尚は城之氣色如死灰城可屠といへるげに〳〵とおむかしまる又人の家に
て物くふをり〳〵こゝろ見るに改ずてもうまく改めてもあぢはひなきはさかえさか
えぬしるしなりさきば心あらむ醫師はためし見よ病人の家よいたりて何なりともく
ひてあぢあるは氣發あれは藥やるかひあるべしうまみなきは氣枯あれは其かひなか
るべしかくいふとあやぶまむえせ人はきたなくけがれたる火もて物を煮て神に奉り
て見よ狐烏もくはぬなりこのものどもは神のおはしましてこれ枯といませたまふをし
るなればくはぬにあむさて里のさかえをしらむには産土神の森を見ぞよき其森の松
杉どもの青黑くあれば氣發あるにて貧しからぬ里なりけりかゝれむ森の木きるべか

ちず神のをしみたまふはさる事ぞ守村加具土神のみあらひあらむ事を早くしりて早
くたづめ奉らむと早くより家根の氣や木どもの氣やに目をとゞめたまど今に正しく
は見えず鼠によりておしはかりかつは柱や壁やとおし　コチを氣發あるべし
なでゝ大かたに思ひしる外なしおろかのわが身や
と思ひとりて見れはコガラシを氣令枯とおもいるかくあれは兼
て小書にもいへる如ゝ氣のカキクケコは通ふ事はもとよりにて
キよりシはもチはも又ヒはもミはも轉りそれより又サにもタは
もハはもマはもその行々は然のまゝを猶外のようつれるもあ
るべし其は口を開けば息の喉本は觸れてアとあり其息を舌は觸
るゝ如ゝそれはイとあり唇を動を如ゝそれはウとあり而して也
ハイの末息オハウの末息かゝてアイウせオの五を成せりこれよ

ワ行の左の方にことにハ行をそへたる人ありさる事なきど我ハ行の左の方にそへまほしと思ふ實は五十五音あるべき也心あらむ人はよくおもへ

りカサタナハマヤラワの九行もなれり　五十連音をおしらへしてらくいきかへたるうきしき人よ元いかよろぶやと覺ゆる事あきふしもあらず又ヤ行とワ行とふハ骨折ちをてオはア行のとれ此中ふラ行をとり入きたる人ハゆらしきと其うまみもかゝたちてしりたりげふ本のにせる人もありいとをらしさをばよく心とゞめさせまゐしさふ

かゝ息が万音をなせは氣のさまゝよ

うつりて詞をあをべき理りよくおもへ息も氣もおあじものぞ偖

筆のついでよいをむ皇國は神のうみたまへる國ありといふをいふかしむがありさる人はよゝきけ大豆もを豆腐こしらふるを考へ見なは二神の國うみとまへる事さとらるべし其は大豆を水よひとしおき臼もをひきあれを釜よをゆで糟をさりを大桶よ入れおく此もの豆腐よならむのなれは國よならむとゝゞよへる泥と

伊邪那岐命のみけしき玉ありたると天り神のみうちとひ玉ひてをしへ玉へるとにて交合の大事あることとハもとよりにてその陰具寶とも寶なる事又いともかし

見その中よさしおろし畫あをものやがを沼矛ありかゝを豆腐よ

せむとを漏し入る、苦鹽よりを凝りを豆腐とあるなり二神の

國うみとまいむと御心おらしをあひましを生漏とまへるもの

よりて凝りを國とあれるありと思ひ得を實に神のうをとまへ

る皇國なりけりとおもひさとりぬ此漏し入る、苦鹽によりを凝

りある事を心にとめて見あは二神のをあひましを生漏たまへる

一雫よありともそれよりをたゞよへるもの國と凝りけむとい

かある人の心の目よも見ゆべしあし　猶ついでに伊邪那岐命ハいさゝらもをたくしの御心ふりおこしたまハぎ女神の言さきたちたまへると不良とおほしつゝもをあひまして水蛭子淡島のあしきゝ子得たまひつをど女を言先し故とものたまはず天にまゐのぼりて天つ神にを

こき陰具なをば上にいへる如くろの氣よくしびのいきをある事をもよくおもへ

ついでに癩病にも妻の久保の毛と七本ぬきとちせて土器の上にて黒燒よして呑ば妙なりとぞ

妻あき男ハ七女のと得てしかすれハよしときく

猶いハむ熱氣凝りて胸をとぢ息たえむとせる時にハ胸下によく干たる土をのせ跨てその上に尿とすれバやハらぐ事妙ありときけり

古事記ふいとも正しけれはそれにより

道反大神たちを村さかひ門べにいつきまつらバ虎例刺などいふ惡氣ハかあらず冤るべし

但佛ぐさき事あれバかひなし

けしきたまハりさる丁天つ神もミうらとひ玉ひてをしへたまへり此ぞ皇國の道のはじめありける心あらむ人はよくもあしくも親あらは親に親あくは老たる友人にまうしてとしへとゑへ神あらふなり又夫婦の交合ミたりになせそ天地の氣のよき夜夫婦の氣のよき夜月のさはりのよく〳〵きよまりたる夜ふ　かゝる又

ゑりかへしゑだ〳〵しけれど天之御中主神と時いたりて氣の凝りてあらハれそめ次丁高皇產神皇產二神あらハれまして氣もて萬物をむしあしたまふ御業はあの男女の大神の大御心ありされど此三柱乃神たちを一口丁氣產靈神と申してもあしゑハあらじとぞ思ふ世中丁神を多丁坐せども殊丁仰き奉るべゑ崇き奉るべしとおぞゆるは此三柱大神丁なむさるを書紀の正書丁を略きて載られぬをあしあかれど舍人親王も時のをやりの漢籍ぶりに御心とられて漏し玉へるあるべし又本居翁ハ漢籍ぶりはふり捨つゝも伊勢人故丁天照大御神丁心とられけむ此大御神におしあらべて尊むべき道反大神を玉鉾百首によみおとしたりいとあぢかし

天照大御神あをまもと大御神と見え道反大神あをまもと大神と見ゆ此二神の外にはあをますやがて大神と尊稱せるは一神もおしさきばまがの氣をはたたあき國へちかへしの大神あればいつけ諸人と思ふ　さて氣象の考へいまだ誰もせされは上にゑハしくいへれど氣の凝りて神とあるべきか神とあらハれぬべきかとあやぶミかつは守村が強言とおもふ人のおかあるべければ猶氣の凝りて人となりとる事をもきときむ今昔物語廿七第五冷泉院水精成人形被捕語

今昔陽成院御所ハ云々夏比西臺延人寢長三尺許有翁

来寝人顔捜ハ怪思トモ怖シテ云々兵立者有云々捕ヘム云其延ニ只獨苧繩ヲ具ニ卧云々面物氷ヤカニ當レバ心懸待事ナレハ寝心急思驚クマニ起上捕云々縛被付目打叩有人物問ヘトモ答不爲暫許有少咲此被見廻細陀氣音云盥水入得ムヤ然大キナル盥水入前置タレハ翁頸延ヘテ盥向水影見我水精ト云水ツフリト落入ヌレハ翁不見成云々と見えとり水の氣凝りて翁とあらいれ口をもきゝとるを思ふべし猶いふあしき事とをもゝ同第六東三條銅精成人形被堀出語おゝを見よ南山長三尺許五位太リタルカ時々行ケル御子見給怪ヒ給ルニ五位行事既度々成レハ云々あの五位銅の氣の凝りてあらいれ出とるなり抱朴子登渉篇に萬物之老者其精悉能假託

古傳ニ天照大御神の於吹棄氣噴之狹霧成坐女神速須佐之男命の於吹棄氣噴之狹霧生坐男神とあるをもよく考へなは氣の神より形り玉へる事あきらかよーちるべーとも思ふ

人形ニ以テ眩惑人目ニ而常ニ試人ヲと見えたり考へ合すべー　又和名抄ニ樹神山鬼をおとまといへり此は年へとる木の氣が凝りて志あらいれて人目を驚かすなるべし今いふ天狗ありこの天狗には僧の氣が凝りてあれるもさまゝあり　あばこり説明して安萬侶太朝臣の既凝氣象未效といへる外は漢籍ぶりにかゝれたれど氣の凝りてあれる事をさとられてあれは誰知其形といひおこして而參神作造化之首とはいへるあり心あらむ人はこゝの文章のいきほひを心の目もてよく考へ見てよ　既に氣の凝りてある趣をいへる人凡千百七十年ばかりに獨もあらざめれは氣の凝りて御親神三柱なりたまへりの此説又その氣をキキとかさね音をうつろいして尊稱のカミと申す詞といふ考へいとめぢらしすぎてとが耳にも入らざるべしとは思ひつゝも神にもこひのみてさとり

たれはき、おどろきねふりをさまして時鳥の初音あはうれしや
とおもいむ人のあきましもあらじとふりゑらすさみたれまたば
うく窓ざもりして

水ゑきの跡をながしけりいきたまの
いばれの海に今かおつらむ

人の耳まいりやをうれとのみつとめたれはきよあらぬ詞ばあひ
もありぬべしあし

追考

神漏伎神漏美の皇神たちは元氣の擬りてありたまへりと又神字あつるカミといふ尊稱の詞は氣々の轉音と腹に入りさちむ人はきゝてよ抱朴子至理篇ゐ夫人在氣中氣在ニカミ一カミニ

氣字をカミとよめるはヨが意形り

人中自天地至于萬物無不賴氣以生者善行氣者内以養身外以卻惡然百姓日用而不知焉吳越有禁呪之法甚有明效多死耳知之者可以入大疫中與病人同床已不染又以群從數十人皆使無所畏此是死可以攘天災也とありこを我心なをは虎例刺病の中に居てまじかひしつをどうつちざりけり偖氣は尊きものゝら上ゐいへる如くよきありあしきありよきはまれにてあしきはこゝちあり病氣疫氣はさるものゐて儒佛の魔氣もあをはあひまじひるとり〳〵心してふきはちひ神の正氣とうちまねくぞよき右にとり出たるめでたき證しとよく思へ惡氣とさる玄術なりゝ

うつゆふのせばき窓まこもゝひてをとゝるをあつめ雪をつをてむ
なぎまゝち牛の汗すばありの書籍よみてそが心をしれゝむもこ
とまいひ出ざるい夜る光玉を袖につゝをてひめもゝゝむがこと
し又ふゝりをゝりの人をつとへをそが心をゝきさゝとすいいひ出

さるにはまことしまさりぬべけれどそもかぎりあればよる光さま
を家ぬちにをゝうむが如し何のあひかいあうむいでやこの玉を
都大路ままろばしいだして闇のちまゝまどふ人を照らを大き
ある功業い何ぞといふにあゝらしゝ考へえゝるふしをあきつ、
りて世にしらしむる外をあらじあしこれをゝいとあゝき業なめ
るを吾師守村翁わはあき時より神典ま深ゝ心いれられそのいと
ままは言葉の活き字音の學をもあきらめゝまひて本居平田の大
人をぞ尊ゝけるさるをこのころ来りていへらゝそこがしれらむ
如くふゝうしのをしへをあしこゝをつ、なお考ふるまやあとなき

大神のなま、よりなりましけむそのもとをいをぎれはあゝぎ口
をしいあでとをやゝのとしより書籍どもあなぐりをやう〳〵考
へ得つされど笹森の下草むらをを引出を鈴ふるむしい我身なり
けりとうちなゞあるゝ身ましあれはをべなくてうちおきぬるを
折しも貫前神社遷宮まを武藏國三峰神社祠官彌三郎堀越氏きを
りされは山城のおまのわゝりの瓜ならでなりもならをもいひ試
ゝてむとおもひて氣象考版にせまおしくおもへどちあらなしゝ
がねもゝひらゝとせがほどめゝゝてよといひ出れば草稿見をと
いへりそが側に中岳の祠掌五藤武雄見えけれはとひ見るま何あ

著述出版ならばと兼て思ひてありけれはまあらをべしと則にき
、うけとりうれしともうれしおは皇神達のうべなひとまへる說
ゑをのゝもめゝをあるあなとおかゆ又年立あへるよろこびゑ權
少講義小間治貞来をおのよしき、をおれもいあでといふかゝを
いいそぎをとおもへど信濃國へ旅とちかへりを後も何ゝれと事
しゞゝを思ひつ、もふり捨おきとりおれ見を卷のしりへゑおの
故よしかけとあるにあしおまりもおかを空ゆゝ雁のつら〳〵に
よを、るにおれぞかのよる光とまとゝゞへつべしあいれその玉
も家ぬちををらをまでおりけむを皇國をおもふを、しき人々の

とちからもを都大路ゑまろばし出しをやをのちまとゑまどふ人
を今をと照しあむとをかゝをいこの人々のみいさをも此書籍と
、もにちとせの、ちまでいをりとをりを見む人の仰かぎらめや
よまむ人の尊まぎらめやされは天あけらむふとうしのをとまも
をる〳〵にをあいしをいあゞはよろあばざるべきおのれはひ
わばにてまろをしいださむをちからもあらざればおよびゝひつ
、をろ〳〵に一言しるしぬ

五月廿六日　　高崎人　田島尋枝

一裏　神コハかミ　三裏　導コハふ
四裏　たたがいてコハひ　五表　相ハひ
十表　あちづハず　十一表　口よりしコハナクナ
十二表　高字とハコハあ　同表　思やらるコハふ

和泉國堺人清雄小田氏ヨリ猶誤アリトイヒオコセタル嬉シサニ

三丁裏　氣味　四丁裏　高
六丁表　なとふと出て　八丁表　頭人ほは
八丁裏頭　あしくびかび　八丁裏　騰
十丁裏　天皇の乃　十九丁裏　登陟
廿二丁表　數十人十人　廿一丁表　光
廿二丁裏　則即　廿三丁表　とちからた

明治十八年四月十七日版權免許
明治十八年九月十五日　出版

著者出版人　新居守村
群馬縣上野國北甘樂郡
高瀬村住居

定價金三十錢

一裏　神コハかミ。
四裏　たたがいてコハひ。
十表　あちづハず。
十二表　高字とハコハあ。
十二裏　呼ろめたればコハび。
十三裏　頭ノ國あとハる。
十八裏　交合ハひ。
十九裏　をもをゞハお。
廿一裏　とくちむハおナリ

三裏　尊コハふ。
五表　相ハひ。
十一表　口よりーコハナクテ
同表　思やらるコハお。
十三裏　用ゐせず。コヽニゼアルナリ
十四表　あやぶむもあはむハち。
十九表　頭古事記ヨコハナクテ
廿一表　まじひるコハゑる

明治十八年四月十七日版權免許
明治十八年九月十五日　出版

定價金三十錢

著者出版人
新居守村
群馬縣上野國北甘樂郡
高瀬村住居

群馬県立図書館
0434923-9
8456 群馬県立図書館